



Via Latina 22

2025年3月 339号

総本部よりのお知らせーマリア会

内 容

コートジボアール従属地区での終生誓願式	1
コンゴ-特別地区での司祭叙階式	2
パブロ・ランボ-師とデニス・バウティスタ士がインド地区を訪問	4
マドレーヌ聖堂への訪問	5
スイス地域共同体への訪問	6
Faustino Pérez Manglano-Magro: 苦痛の中で私たちの希望を証言する	7
Mineola 聖歌隊が Via Latina 22 を訪問	10
祈 願	10

コートジボアール従属地区での終生誓願式

2025年2月8日、土曜日、コートジボアール従属地区は、アビジャンのノートルダム・ダフリク中学校共同体のメンバーである、Affi Michel Cissé 士の終生誓願式を執り行う喜びを得ました。Michel 士はノートルダム中学校の財務責任者であり、またコートジボアール従属地区の財務責任者です。終生誓願式ミサは従属地区長、Noël Dominique Kouao Akobé 師によって司式されました。フランスの地区長で、コンゴ-とコートジボアールのフランス語圏行政単位の責任者、Jean-Marie Leclerc 士が教会法上の視察でアビジャンに来ており、Michel 士の誓願を受け入れました。コンゴ-特別地区の責任者、Romuald Mfumu 師が、特別地区の在外自国民修道者への教会法上の視察でアビジャンに来ており、彼も又式典に出席しました。



マリア会員 Affi Michel Cissé 士の家族とともに

大勢のマリアニスト家族も Michel 士の家族の人たちや友人と一緒に参加しました。ノートルダム中学校の職員や生徒たちの出席も見られました。Michel 士が以前勤めていたトレイクヴィルのマリアニスト聖ドンボスコ校からの代表者も出席していました。

さらに、Michel 士を励まし、式典に出席するために大挙してやって来た他の修道会の多くの男女修道者が参加していました。

誓願式は厳粛で祈りに満ちていました。祝賀は立派なものでした。式典は、マリアニスト修道者によって提供されたお祝いの食事をもって全て終了しました。全マリア会とこの従属地区の兄弟たちは、Michel 士が汚れなきマリアへの奉仕に終生を誓ったことに感謝とお祝いを申し上げます。

彼が、自分に委ねられた福音宣教への献身に成長し続けますように！

コンゴ特別地区での司祭叙階式

2025年2月2日、日曜日、奉獻生活者の日として特別な意味を持つ「主の奉獻の祝日」に、マリア会、フランス地区、そして特にコンゴ特別地区は、喜びの中に、新しいマリアニスト神父、Messi Gatien Loubiya の叙階式を祝いました。

Messi 神父は、ムコンドのサンリタ小教区にて、ブラザビル大司教区、Bienvenu Manamika 大司教の神への奉獻の祈り、および按手によって叙階されました。

大司教は彼の説教の中で、司祭職のもつ多様な面を強調しました。彼は Messi 神父に、司祭職は昇進ではなく何よりも奉仕であると念を押しました。大司教は「神の僕の中の僕」になるよう Messi 神父を励まし、自分に委ねられることになる神の民、および共同体の兄弟たちに迅速に奉仕するよう彼に呼びかけました。大司教はまた、自分の民に会いに出ていく

「国々の光」であるキリストをイメージして、自分の共同体のために光となるよう Messi 神父に促しました。



大司教は、奉獻者と神の民全員に呼びかけ、彼らが皆、国々を照らす光となるよう激励しました。彼は集まった人たちに、父なる神への自分たちの捧げものを新たにしよう勧めました。説教の結びで、大司教は Messi 神父にお祝いを述べ、彼の司祭職の賜物を神に感謝し、そして Messi 神父がキリストの心に従う司祭となるよう、祈りのうちに彼に同伴すると約束しました。



Messi Loubiya 師、家族と Bienvenu Manamiku 大司教ともに

この祭儀式典には全マリアニスト家族、ブラザビル大司教区の奉獻者たち、司教代理たち、キンカラ教区の司教代理、そして多くの教区司祭が集まりました。フランス地区からの代表で Guillaume Gervet 士が出席しました。コンゴ特別地区の会員全員は、小教区信者の協力を得て、この式典の典礼と祝賀会の準備を滞りなく行いました。

新司祭は 2025 年 2 月 9 日、日曜日、彼が育った出身教会であるムコンドの聖リタ小教区で初ミサを執り行いました。小教区評議会はこの行事を立派に計画実施しました。私たちは Messi 神父の宣教活動が実り多いものであり、多くの実りをもたらすよう彼のためにお祈りします。

パブロ・ランボー師とデニス・バウティスタ士がインド地区を訪問

90 名に及ぶ兄弟たちとの個人面談、13 回の共同体会議、地区での 2 回の説明会、誓願 25 周年式典、約 2 キロ食べた美味しいコメの料理。インド地区へのパブロ・ランボー師とデニス・バウティスタ士の 17 日間の訪問の間の数えきれない素晴らしい思い出。

この訪問は、Deepahalli での地区メンバーへのプレゼンテーションをもって、バンガロールからスタートしました。Infant Nilaya と Chaminade Nilaya を含む地域の共同体との会議の後、彼らは Nirmal Deep での 2 回目の地区メンバーへのプレゼンテーションと Marianus Bilung 士の誓願 25 周年の式典のため、ランチに赴きました。それから彼らはシンプールの Gyan Deep と Fidel Nilaya 共同体で時間を過ごし、そして Shanti Deep、Santa Maria、そして Nazareth Nilaya の共同体でマリアニストシスターたちを訪問しました。オーディチャーへの 5 時間のドライブ後、彼らは、行政単位の評議員会との最終会議のためバンガロールに戻る前に、Maria Nivas 共同体に留まりました。



パブロ・ランボー師とデニス・バウティスタ士のプレゼンテーションの後
小グループになったインド地区の会員たちが総会文書についての意見交換

マリア会の最も新しい自立地区であるインドは、ほとんどの行政単位より平均年齢が若く、75 名の誓願者を有しています（48 名の信徒会員と 27 名の司祭会員）。この地区の学校とソーシャルワークは、困っている若者と家族に大変な影響を与えています。この国の文化は、家族の一致、相互尊重、また人間関係など、マリアニストの重要な価値基準を映しています。

インドは様々な課題に直面しています、例えば、教会内の聖職者中心主義、財政的困難、そして学校におけるカトリックの考え方への政府の反対などです。121の言語と270の方言を持つ地域文化の多様性は、養成に複雑さを加えています。マリア会の全ての行政単位のように、彼らも同様に継続養成、召命の発掘、そして指導者の養成について気を配る必要があります。

これらの課題にもかかわらず、インドはマリア会の将来に重要な役割を果たす準備ができています。この地でのマリアニスト家族とマリアニストカリスマの絶え間ない成長のために祈りましょう。

マドレーヌ聖堂への訪問

2月10日から17日にかけて、ジェローム・バラキイエマ士とアンドレ・ヨセフ・フェテイス師がボルドーのマドレーヌ共同体と活動を訪問しました。私たちの創立者が活動し、私たちのカリスマの源泉であるこの場所に居ることは、常に印象的で意味深い経験です。マイケル・マッカワード士がこの聖堂の会計システム構築を支援するために来ました。

私たちの訪問は私たちの兄弟 Robert Witwicki 師の帰天に偶然に重なり、私たちはマリアニストカリスマと福音宣教への彼の生涯と熱心な奉仕活動について感謝しながら彼の最後の時に寄り添いました。

共同体は9名の修道者で構成されていますが、そのうち2名は引退者住居で生活しています。この聖堂は、特に祈り、霊性、そして赦しの秘跡の場として、ボルドーの大司教区で一つの評価基準となっています。福者シャミナード師の現存がそこで輝いています。



マドレーヌで2月17日に集まった“マドレーヌ聖堂委員会”

マドレーヌ聖堂委員会は2月17日（月）に会合をもちました。このグループはマドレーヌのあり方を指揮・監督し、それに法的組織を提供します。この委員会は、マドレーヌ共同体とヨーロッパマリアニスト家族の代表者、ヨーロッパマリアニスト評議会議長、フランス地区の地区長か彼の代理、そして総長評議員会の代表者で構成されています。彼ら全員、この共同体の活動と、マリア会およびマリアニスト家族全体から示されている支援の増加に感謝しました。一つの注目すべき点は、私たちの創立者に会いに来るグループの訪問数が増えていることでした。昨年、ボルドーの大司教区から、私たちのグラン・ルブラン高校から、ヨーロッパと世界から、そしてオーストラリアからも来訪がありました。私たちの一つの望みは、若者たちがマドレーヌでもっともっとアットホームな気持ちになってほしいことです。

私たち全員にとって非常に大切なこの場所の影響力が広がるよう祈りましょう。私たちのカリスマの養成のためにここで学びたい会員、あるいは、ここの福音宣教に協力したい会員は、総長評議員会のメンバーの誰かにコンタクトしてください。

スイス地域共同体への訪問



スイスのマリア会員との会合にて

2月18日から27日にかけて、ジェローム・バラキエマ士とアンドレ・ヨセフ・フェティス師がスイスのCTS（スイス地域共同体）を訪問しました。CTSは7名の会員で構成されており、その中の1名はUSA管区で宣教活動に就いています。フリブール大学で勉強しているトゴ地区からの2名の会員がいて、修道者たちはシオン、フリブール、およびナータースの3箇所に分かれて住んでいます。平均年齢は80歳ですが、修道者たちは、3つのレベルの個人的な関わりで、マリアニスト共同体の生活を守り続けています：すなわち、小教区での補佐司祭として、MLCと信者グループに同伴して、また他の信者に同伴して。

スイスでの私たちの存在は1839年に始まりました。スイスのSM会員とFMIシスターと共に、私たちはこの186年の間に成し遂げたことに関し感謝し、マリア会における彼らの生活が常に成果をもたらすよう神にお祈りします。

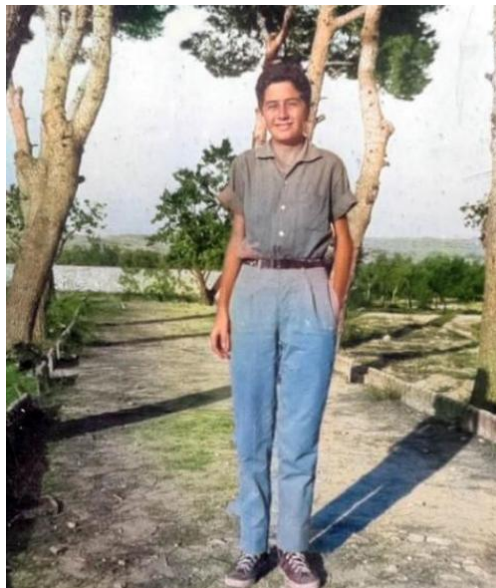
Faustino Pérez Manglano-Magro: 苦しみの中で私たちの希望を証言する

教皇ベネディクト 16 世は、希望に関するその回勅の中で、希望を学び実践する 3 つの「場所」を示していますが、それは祈り、行動、そして苦しみです。苦しみについて話すと、彼は次のように書いています：「人を癒やすのは、苦しみを回避すること、苦しみから逃げるのではなく、艱難を受け入れ、それを通して成長し、無限の愛をもって苦しまれたキリストとの一致を通してそれらの中に意味を見出す能力なのです」(Spe Salvi, 37)。ファウスティーノの模範は、私たちがこのタイプの希望に生きる助けとなります。

病 気

1960 年 11 月 29 日、ファウスティーノは病気になりました。種々の医療検査の結果、最終的に、彼は当時不治の病とみなされていた Hodgkin 病と診断されました。彼は積極的な体力を消耗する治療を受けました。長い期間、彼は家に居なければなりませんでした。自分のリズムをなくさないよう一生懸命取り組み続けました。彼は決して不満を口にしませんでしたが、私たちは、彼の日記の中に、その最も苦しかった時を読み取ることができます：「午後、私はずーと具合が悪かった」(1961/02/06)。

「午前 8 時、私はひどい痛み無しに眠れるよう母にマッサージをしてくれるようお願いしました。午前 10 時、私は目を覚まし、私たちは赤十字に行きました。そして、2 回、レントゲンを撮りました。昼に家に戻った時、私は泣きたくなりました。私は非常に具合が悪く、私の気力は半減していました」(11/27/1961)。2 月以降、彼は授業に行けませんでした。しかしながら、彼は自分の宿題に多くの時間を費やしました：彼は自分の 1 学年度を無駄にしたくなかったのです。



彼はスポーツをすべて制限しなければなりませんでした。できることで満足し、そして自分は幸せであり、全てが「素晴らしい」と日記に書いています；これはファウスティーノの好んだ言葉でした。彼は学校で行われる映画の上映会が好きでした。彼は François

Truffaut 監督の Les quatre cents coups / Four Hundred Blows / 『大人は判ってくれない』を見ました。彼はもうスポーツが出来なくなっていました。が、クラスメイトたちが競技しているとき、彼らと一緒にいました。1961 年、彼はルルドに巡礼し、医師の勧めで、学校の代わりに田舎で一定期間生活しました。レントゲン治療が彼を疲れさせ、彼の身体状況を悪化させたけれども、具合が良いときも数か月間ありました。

病気と苦しみに対して、「Yes」

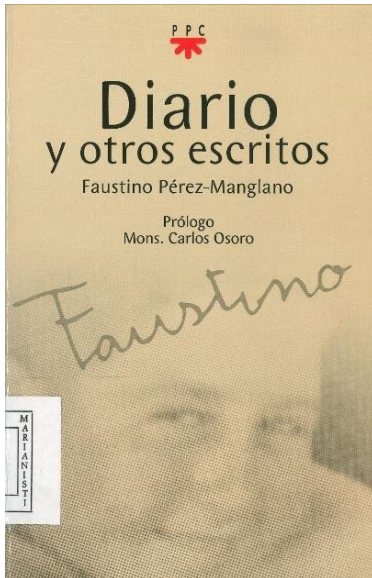
ファウスティーノの病気と苦しみに対する「Yes」は、決して、避けられないことを諦めて受け入れることではありませんでした。彼は次のように対処していました：投げやりにならず、また打ちのめされもしません。彼は全力で戦っていました。寝ていなければならないとき、彼は最善策をとりました；彼はフレキシブルなスケジュールを決め、それに忠実であるよう努めました。彼は勉強の時間を大切にしました。彼は、出来るだけ早くマリアニストになりたいという自分の夢の実現を遅らせるかもしれない世の中のいろんなことのために、1 学年度でも無駄にしたくなかったのです。彼は自分の友人たちとの接触をなくしたくありませんでした。体調が良いとき、彼は友人たちとよく山に行っていました。彼の両親は何であれ彼が可能だと感じることを常に自由にさせていました。人は彼がいつもとても勇気があることに見慣れていました：「彼は自分の苦しみをとてもうまく微笑みで隠していたので、私たちはそれに気づきませんでした」とクラスメイトの一人が言いました。それでもやはり、彼は苦しい日々を過ごしていました。病気になった最初の 2 ヶ月後、熱と痛みがあり、不機嫌な気持ちが起こる体調の悪いある日のことを、彼は次のように日記に書いています：

1961 年 1 月 20 日：「[...] 私は良心を詳しく調べねばなりません、なぜなら私は長い間ゆるしの秘跡をうけていないからです。病気のために、私は神への義務に対して怠慢になっています。夕方、私はロザリオを唱えました。」

そして、それから 2 週間後：1961 年 2 月 8 日 - 「午前 8 時、医師たちが私に会いに来ることになっています。私は怖い、それは明日、赤十字で、彼らは私の腕の下を切開してリンパ節の一部を採取し、それを分析検査するからです。イエス様、私は痛みを訴えることなくあらゆることに耐えるよう強くありたいのです。マリア様、私に不足している力を与えてくださるようあなたの御子に頼んでください。」

翌日、彼は要約しました：「手術は私をかなり苦しめました。私は全く祈りが出来ませんでした」。しかし、ファウスティーノは自分に欠けている力をどこに探したらいいか知っています：キリストの受難についての黙想の中に、マリアへの信頼の中に、そして頻繁な聖体拝領の中に。

1962 年 2 月 26 日、「- 主の受難について黙想するとき、私たちは主が私たちのために苦しまれたあらゆることを理解します…全ては愛からくるものです。主は限りない愛をもって私たちを愛して下さる；主は私たちのことだけを思ってください。こんなにも大きな主の愛に、どうにかしていくらかでも報いることができないものでしょうか？それは私たちの全生涯を彼に捧げる良い理由だと私は思います。」



彼の日記の中で、彼はルルドが彼に残した深い印象と、いつの日か担架の担い手としてそこに戻りたいという自分の願望を表明しています：1961年7月3日、ルルドはとても良かった！ルルドの最も大きい奇跡は、そこで起こっている多くの回心だと私は思います。深刻な疾患に侵された病人立ちが、自分のためではなく、自分たちと同じ病人仲間のためにどのように祈っているかを見るのは驚くべきことです、なぜならこの病人たちは家族を見る責任があるので、もっと長く生きる必要があるからです。いつも彼（ファウステイーノ）は自分より他の人たちが大切です。徹夜で自分を看病したい母にファウステイーノは言いました：「お母さん、寝てください、私を徹夜で看病するのはあたりまえではありません。私が苦しむのはあたりまえです。なぜなら病気は私自身のものですから…しかし、あなたが私のために苦しまなければならないということ…いいえ、ちがいます。それはフェアーではありません！」

2年間、ファウステイーノは勇気をもって懸命に病気と向き合いました。彼は決して自分の喜びや生きる望みも失いませんでした。受けたショック療法が改善の結果をもたらさないや、彼は学業だけではなく、出来るだけ多くの通常の活動を再開しました。彼はスポーツは出来なかったが、自分のひいきのバレンシア・サッカークラブを応援しました。ファウステイーノは人生を楽しむ術を知っていました。

彼の学友の一人が私たちに次のような証言を残しました：「私はキャンプのテントや往復のバスの中で彼の仲間でした。彼はいつも変わらず、決して腹を立てず、またいつも人の役に立ちたい、自分はそれほど良くないもので満足するといった心根を持っており、他の人がくつろげるよう配慮していました。誰かに欠点があるとき、それが最もわかるのはキャンプにおいてだと私は心から思います。私は、彼と共に眠ったり食べたりして過ごした20日間が終わって、彼に何の欠点も見いだせなかったとだけ言うことができます。」

ファウステイーノが自分の日記に次のような感動的な言葉を書くことが出来たというのは何の驚きもありません。これらの言葉は彼の生涯の最高の要約であり、彼の私たちへの遺言のように思えます。

1962年3月27日、「- 私は大変幸せです。私は自分に何が起きているのか知りません、しかし神を賛美します、私は不幸というものを知ったことがありません、それで私は今でも幸せです。皆さんは自分の中に何かを感じています。そのみ手によって常に私を導いてくださり、決して一度たりとも私が大罪を犯すのをお許しにならなかった神さまへのかくも大きな愛を。私は問題を抱えるということがどういふものか知りません。主よ、私はあなたが私にくださるこんなに素晴らしい内的に満たされた状態をあなたに感謝します。心から感謝します。」

Mineola 聖歌隊が Via Latina 22 を訪問

2月26日、日曜日、シャミナード高校（ニューヨーク州 ミネオラ）から35名の生徒と先生たちが Via Latina 22 を訪問しました。これらの生徒は学校のコーラス・メンバーで、この聖年の間、ローマとフロレンスの色々な教会で合唱を披露するためイタリアへ巡礼しました。何人かの両親と家族メンバーが彼らと一緒に来ました。

聖歌隊が Via Latina 22 に到着したとき、ミゲル・アンヘル・コルテス師（スペインー神学校校長とマリア会総代理）が柱の聖母大聖堂で巡礼者を歓迎し、マリアニスト家族の中での総本部と神学校の役割を説明しました。

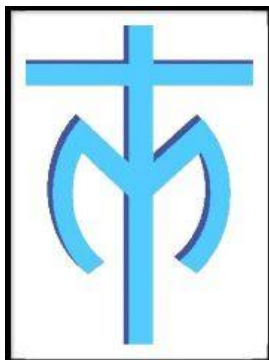
コーラスの披露なしの彼らの訪問はあり得るでしょうか！ Robert Lahey 士（メリバ管区）が最近修理されたオルガンで伴奏して、聖歌隊は Caccini のアベマリアを歌いました。彼らは聖堂の音響効果に非常に驚き、柱の聖母像の前で歌うのに大いに感動しました。また後で彼らは、その日の夕方、聖ペトロ大聖堂でのミサで歌うことにしている、賛美歌「Now Thank We All Our God」（いざもろとも声高らかに）のリハーサルをしました。彼らの訪問の最後に、ミゲル・アンヘル師は私たちの福者たちの遺品を説明し、訪問者グループを祝福しました。これは皆にとって思い出に残る経験でした！



この訪問のビデオを見るには [ここをクリック](#) してください。

祈 願

私たち、マリアニスト修道者は、世界中に広がる全マリアニスト家族、全教会、そして世界の善意あるすべての男女と一致して、教皇フランシスの健康のために祈ります。私たちはこの VL22 の読者すべての皆さんに私たちの祈りに加わるよう心からお招き致します。



主イエスよ、私たちは教皇フランシスのために祈ります、
あなたは彼をペトロの後継者、あなたの教会の牧者として選ばれました。
彼の健康にご配慮ください、彼の知性をお照らしください、
彼の精神を強めてください。
あなたの民のために彼に勇気と愛をお与えください。
そうすれば彼は全教会の一致に忠実に奉仕することが出来るでしょう。
あなたの慈しみが彼を守り、彼に安らぎを与えますように。
あなたの民の証しが彼の使命遂行に勇気を与えますように。
私たちすべての人が、一致と愛と平和の絆を通して、
教皇フランシスコとの一致に留まることが出来ますように。
教皇フランシスコがマリアのうちにあなたの愛のしるしを見出しますよう。
あなたは御父と聖霊と共に世々に生きて、治めておられます。アーメン。

(「困っている教会への助け」の祈りからの改作)

最近の総本部通信

- 訃報：3-8号
- 2月4日：FMI 総会からのメッセージ、総本部書記、ホセ・イグナシオ・イグラシア士から3ヶ国語で全マリアニスト修道者へ送付
- 2月5日：Horizons 2026、教育局長、デニス・バウティスタ士から3ヶ国語で行政単位責任者と霊生補佐へ送付
- 2月11日：2025年マリア会教育事業統計のための情報要請、教育局長、デニス・バウティスタ士から3ヶ国語でラテンアメリカと日本の教育補佐へ送付
- 2月17日：マリアニスト家族の保護の祝日のためのメッセージ、マリアニスト家族世界評議会から3ヶ国語で全マリアニスト修道者へ送付